

P2-045

日常診療に潜むヨード過剰を契機に発症した甲状腺機能低下症—4 症例の経験と考察—

田嶋 華子¹⁾、古園 美和¹⁾、深澤 隆治²⁾、竹下 輝¹⁾、佐野 透美¹⁾、橋本 康司¹⁾、早川 潤¹⁾、五十嵐 徹¹⁾、小林 光一¹⁾、楊井 瑛美¹⁾、川上 康彦¹⁾、宮田 真貴子¹⁾、高橋 美奈子³⁾、右田 真¹⁾

日本医科大学武蔵小杉病院 小児科¹⁾、
日本医科大学付属病院 小児科²⁾、
日本医科大学武蔵小杉病院 看護部³⁾

【はじめに】日本人は海産物を多く食べる傾向にあり、気づかないうちにヨード過剰になっていることがある。また、造影 CT 検査や子宮卵管造影はヨード系造影剤を使用するため、その後に一過性のヨード過剰をきたす。ヨード過剰は甲状腺機能低下症を引き起こすことがある。

【症例 1】7 歳女児。易疲労感、頸部腫瘍を主訴に受診した。甲状腺腫大を認め血液データで TSH > 100 μ IU/mL、fT4 0.5ng/dL、抗甲状腺抗体陽性であり橋本病と診断した。患児は発症の 2 か月ほど前より乾燥昆布を毎日食べていることが判明した。尿中ヨード上昇を認め、ヨード過剰の状態であった。レボチロキシン開始およびヨード制限により甲状腺機能は正常化し、症状は改善した。

【症例 2】日齢 10 女児。新生児マスキングで TSH 高値を指摘され受診した。明らかな臨床症状はなく、超音波検査で甲状腺は腫大していた。母体は本児の妊娠成立前に 2 回子宮卵管造影を受けていたことが判明し、児の尿中ヨードは高値であった。レボチロキシン開始後甲状腺機能は正常化した。

【症例 3】日齢 12 男児。新生児マスキングで TSH > 81 μ IU/mL、fT4 0.42ng/dL であったため紹介となった。超音波検査で甲状腺の軽度腫大を認める以外、臨床症状は認めなかった。母体は妊娠発覚後から出産直前まで連日昆布を摂取していたことが判明し、児の尿中ヨードは高値であった。レボチロキシン開始後、甲状腺機能は正常化した。

【症例 4】37 歳女性。先天性心疾患があり乳幼児期に手術を受けた。術後の経過観察目的で造影 CT 検査を施行した約 1 か月後、倦怠感および呼吸困難を訴え外来受診した。肺うっ血を認め、TSH25.6 μ IU/mL、fT4 1.3ng/dL、抗甲状腺抗体陽性であり橋本病と診断した。尿中ヨードは上昇していた。レボチロキシンを開始後、症状および心機能は改善した。

【考察】ヨード過剰が甲状腺機能低下症の発症、増悪に関与したと考えられる 4 症例を経験した。海藻は健康食に位置づけられることも多く、また、造影剤を使用した検査は日常的に行われている。わが国では潜在的なヨード過剰が多いとの報告が散見されるが、日常診療では看過されている可能性もありうる。甲状腺機能低下症の診療にあたってはヨード摂取に関わる聴取を行うことに加え、ヨードに対する感受性には個人差があり、特に小児や抗甲状腺抗体陽性者は注意が必要であるということ、何らかの形で啓蒙していけたら、と考えている。

P2-046

幼児における食事摂取状況及び唾液コルチゾール濃度 —4 歳児と 5 歳児の比較—

村上 亜由美¹⁾、野崎 涼香²⁾、竹内 恵子¹⁾、岸本 三香子³⁾

福井大学 教育学部¹⁾、
福井大学大学院 教育学研究科²⁾、
武庫川女子大学 生活環境学部 食物栄養学科³⁾

【目的】幼児における食事摂取状況、睡眠状況、唾液コルチゾール濃度 (cor) の日内変動について、4 歳児クラス (4C) と 5 歳児クラス (5C) の幼稚園児を統計的に比較することにより、成長による変化を明らかにすることを目的とした。

【方法】調査は、2014、2015、2016 年 6、7 月の連続する 3 日間に実施した。保護者の同意が得られた幼児のべ 38 人 (男児 18 人、女児 20 人) とその母親を対象とした。その内訳は 4C 22 人 (男児 11 人、女児 11 人)、5C 16 人 (男児 7 人、女児 9 人)、7 人が 2 年間連続で調査に協力したデータを含んでいる。幼児の食事記録、睡眠状況、健康状態について保護者に調査を行った。唾液 Cor は、1 日 4 または 5 回採取し、測定した。

【結果】睡眠状況は、5C では 4C より、平日就寝時刻、休日就寝時刻、平日起床時刻、休日起床時刻が、わずかに遅くなっていた。食事摂取状況を比較すると、総エネルギー摂取量に対するエネルギー産生栄養素であるたんぱく質：脂質：炭水化物の構成比率 (PFC 比) は、4C と 5C のどちらも約 15 : 29 : 56 で有意差はみられなかった。5C では 4C より、身長、体重の増加はあったが、エネルギー摂取量の増加はわずかであった。食塩相当量は、5C 4.4 \pm 1.0g で 4C 3.7 \pm 0.8g より、有意 ($p < 0.05$) に増加した。油脂は、5C 10 \pm 5g で 4C 7 \pm 3g よりも増加傾向がみられた。5C では、緑黄色、淡色とも野菜摂取量はわずかに増加し、葉酸、ビタミン C 摂取量も増加した。また、5C では、嗜好飲料摂取量は増加、乳摂取量は低下し、それに伴いカルシウム摂取量は減少していた。唾液 cor は、5C で 4C より起床時、起床 30 分後、登園時、降園時で平均値が有意に高く、就寝時には高い傾向がみられた。

【考察】5C の食事摂取状況は、4C から成長に伴った必要な増加がみられない栄養素がある一方で、嗜好の変化と推察される摂取食品群の変化がみられた。学童期へと繋がる食習慣形成として、養育者のいっそうの配慮が必要である。唾液 cor の平均値の差異については、さらに調査対象者を増やした検討が必要である。